



2013年(平成25年)

9月号(No. 820)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

2013年夏 日本の登山の現在地

江本嘉伸

富士山の世界文化遺産登録、気象庁の特別警報、猛暑日、竜巻被害、山を舞台に「命を守る術」を学ぶ若者たち、そして国立登山研修所の果たす役割……。2013年の半分が終わろうとしている今、前半の出来事を振り返り、江本嘉伸会員に日本の登山の「いま」を語ってもらう。

9月8日未明、ブエノスアイレスで開かれたIOC総会最終決戦で、東京は60票対36票で2位のイスタンブールを破り、2020年オリンピック・パラリンピック開催を決めた。NHKなどテレビ各局は徹夜でその模様を中継し、新聞各紙は翌日が休刊日ということもあって十数ページもの大部の「特別号外」を出した。歴史は、毎年新しいページを繰りつつ進むも

ただちに命を守る行動を！

「特別警報」の発令

連日続いた「猛暑日」。8月12日には、ついに高知県四万十市で41

目次

2013年夏 日本の登山の現在地	1
平成25・26年度新役員紹介	4
第33回日本登山医学会学術集会	6
グローバル社会と登山医学などをテーマに 羽田栄治さん、「お別れの会」開催される	8
東西南北	9
山名一考	
支部だより	10
越後支部／千葉支部／ 東九州支部	
活動報告	13
自然保護委員会	
図書紹介	14
図書受入報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
新入会員	17
INFORMATION	18
日本山岳会所蔵資料紹介 No.5	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

℃という日本の史上最高気温が記録された。熱中症で倒れ、時には死亡するケースが相次ぎ、「こまめに水分を」「適当な冷房の利用を」という呼びかけが繰り返された。3・11の後、日本中を席卷した「節電」の呼びかけは影をひそめた。

41℃を記録した四万十市に住む友人は、私からの電話で日本最高気温を知った。寝たきりの母親の部屋の室温調整のため、日中はテレビをつけないでいた、という。「テレビの熱で、クーラーを最低温度の16℃に設定していても室温は28℃を超えてしまふんです。まったく、『今までに経験したことのない猛暑』です」と、話していた。各地で「今まで経験したことのない事象」が起きたため、気象庁は

8月30日からは、大雨、地震、津波、高潮などに関連してこれまでの「警報」に加えて、この警報の発表基準をはるかに超える豪雨や大津波などが予想され、重大な災害の危険性が著しく高まっている場合、新たに「特別警報」を発表し、最大限の警戒を呼びかけることになった。そして、特別警報が発令されたら「ただちに命を守る行動をとってください」と呼びかけた。

それはまさに山の世界で真っ先に受け止めなければならない決定であろう。山は、「ただちに命を守る行動」を常に意識させられる世界だからだ。

「信仰の対象と芸術の源泉」として、世界文化遺産に選ばれた富士山

13年、夏山で最も話題になった

のは、ユネスコの「世界文化遺産」に登録された富士山である。6月22日には、関連する文化財群とともに「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」の名で、除外が心配されていた三保の松原も含めて登録された。

7月1日の山開き前後からメデイアは様々な特集を組んだ。世界各国からの登山者も含め、登山道は激しいラッシュが心配された。緩和策として考え出されたのが「入山料」である。今回は、初の試みとして強制力のない1000円、しかも7月25日〜8月3日の間とした。3413万2422円が集まり、またこの期間中に下山した3261人にアンケート調査を実施、9月6日、静岡・山梨両県がその結果を発表した。

それによると、67・8割の人が支払ったと答え、78・7割の人が協力金導入に「賛成」と回答。協力できる金額で最も多かったのは「1000円〜2000円未満」の44・6割。次いで「3000円〜5000円未満」の14・3割、「1万円以上」も3・2割いたという(読売新聞ほか)。

富士山の環境保全のためにお金

の負担は必要、と多くの登山者が考えていることがうかがえるが、両県は来年のシーズンまでに、いくら、どのようにして登山者から協力金を払ってもらうか、決める方針だ。この動きは、山岳地域の環境保全のため、富士山以外にも広がってゆくことを予感させる。槍、穂高など人気が集中している山岳地域には今後、いろいろな提案がなされるかもしれない。

大事なことは、富士山の文化遺産登録については、「信仰の対象と芸術の源泉」という踏み込んだテーマが正式名称となっていることだ。富士講はじめ、富士山には奥深い伝統文化がある。今後が増えるであろう外国からの登山客のためにも、私たちは基本的な学習、理解をしておきたい。

富士山はとりわけ「5合目から下」に、変化のある自然と様々な信仰のかたちが残っている。たとえば、富士修験が成立したとされ、最初の登山道と言われる村山口である。3年前、岳友と田子ノ浦の太平洋岸からテントを担いで、「村山新道」をたどって山頂を越え、吉田口に下ったことがある。多くの修験の足跡に出くわし、海拔ゼロ

からの富士登山は新鮮だった。富士山の魅力を見いだすことは、シニアにとっても刺激的であり、高所だけではない富士山の魅力についてもひろく理解が深まれば、世界文化遺産登録の目的にも適うであろう。

長野の高校山岳部の夏合宿 国立登山研修所の新時代の役割

今年、夏山で長野県の高高山岳部の活躍が目にとまった。「不定期刊行 中信高校山岳部かわらばん」という情報版がある。長野県池田工業高等学校の大西浩教諭が責任編集しているもので、8月18日に刊行されたその「第494号」に「池工山岳部、ちよつとハードな涸沢合宿」との見出しの記事が載っていたのだ。

8月13日から16日まで、3泊4日で涸沢をベースに池工の山岳部の夏合宿の報告。1年3名、2年が2名の5名に、2人の顧問とコーチが同行した。横尾本谷から右股を遡行、南岳、大キレットを越えて北穂に登り、涸沢に戻るといいう、高校生にしては難コース。実際、本谷の雪渓ではロープをフィックスして通過する場面もあった。



雑穀谷での研修の様子

また、キレットの途中、年配の登山者が岩稜から転落する事故に遭遇、ヘリで救出してもらった展開もあり、結局この日は13時間の行動となった。翌日はテントをたたんですべて背負ってザイテングラートから奥穂、前穂を経て岳沢まで、10時間半の行動だった。生徒たちは疲労困憊しながらも、4つの3000m級の頂に立てた充足感に満たされたとのことだ。

あちこちで高校山岳部の衰退、廃部を聞くことが多かったのですが、なんとも頼もしく感じた涸沢合宿の報告。当の大西さんとは7月はじめ、立山の国立登山研修所の専門調査委員会で会い、長野県の高高山岳部の現状について話を聞く

ことができた。大西教諭は長野県山岳協会の理事長を務めるベテランだから当然だが、この「かわらばん」(<http://www.ngn-hssp.org/tozan/index.html>)を読むと、つくづく山の世界にいい指導者がいることの大切さを感じる。

そして、国立登山研修所。ここ20年、剣沢の前進基地を含め取材で何度か足を運んでいるが、この夏、久々に、それも専門調査委員という立場で訪ね、考えさせられることが多かった。何よりも、この施設が日本にあつて良かった、と改めて実感したのである。

私は、3・11以後、若い人たちと震災の現場に通い続けているが、すさまじい被害を目のあたりにして、日本という国の自然環境のなかで生きていくために、山人間がやってきたことがいかに大切であるか、をつくづく感じている。生と死は、ほんの一瞬の判断力、行動力の差で決まる。大人、教師たちが子どもたちとともに日ごろから自然と親しみ、登山の技術や知識を高め、広めていくことが日本のなかでは非常に大きな社会貢献になり得ることを3・11は教えた。日ごろ感じているそんな趣旨のこ

とを会合でも発言させてもらった。

1963年1月、薬師岳で豪雪のなかルートを誤り、愛知大学山岳部13人全員が遭難死するという痛ましい出来事があった。この事件をきっかけに67年7月、国立登山研修所は開所したのである。優れた指導者を養成して登山事故の防止に努める、というのが目的だった。しかし、実はいまはもっと大事な役割があるのではないか。研修所での現場指導を通して、子ども、若い人たちが自然と接する機会を増やし、自分の命は自分で守る、という生き延びる技術をあらゆる機会に継承してゆくことを心がけることであろう。

たまたま「安全登山普及指導者中央研修会」のプログラムと重なったため、2日目は、短い時間、研修所に近い雑穀谷の岩場でクライミングの基本を学ぶ現場を見せてもらった。横山勝丘、加藤直之といった第一級クライマーが受講者に手取り、足取り、丁寧に見える姿になんと驚沢か、と思う。若ければ自分も参加したかった。

愛知大学の遭難は全員学生だったが、いまは高齢登山者の遭難が圧倒的に多い時代である。高年

者の遭難防止は大切だが、加えて若い世代への安全登山教育、命を守る教育にも力を注いでもらいたいと思う。

ナンダ・コートの装備、写真 そして、影エベレスト

立山には、2か月後の9月4日にも足を運んだ。芦峯寺にある富山県立立山博物館で8日まで特別企画展「ナンダ・コート 日本初のヒマラヤ遠征登山」をやっていた。そこに堀田弥一さん(2011年2月23日、102歳で逝去)の1936年当時の写真、装備が陳列されているのだ。

堀田さんとは、生前、ご自宅に伺い、長い時間インタビューさせてもらっている。ナンダ・コートのこと、マナスル2次隊の時の苦労を主に聞いた。鉄靴、毛皮のチョッキ、絹の下着など、革製のトランクに詰めて大事に保管されていた当時の装備は、立山博物館に寄贈され、今回久々に公開されたのだった。

堀田さんが残した77年前の1944点の貴重な写真も印象深かった。話は現代の山の写真について。7月19日、写真家・石川直樹氏の

ローツェ登山を中心とする地平線報告会には実に興味深かった。筆者は地平線会議という活動のなかで毎月欠かさず「報告文」を開いているのだが、7月19日、411回ので地平線報告会を久々に石川君に頼んだのだ。2001年、11年と2回のエベレスト登山、12年のマナスル、そして今年、13年春のローツェ。ラッセル・ブライス率いる公募登山隊のメンバーとしてだが、青年が何度も高所登山を重ねて、逞しくなつてゆく様子がよくわかった。そして驚いたのが「影エベレスト」の写真である。明け方の空、雲海にほぼ正三角形のエベレストの鋭い影が見事に映っていた。記録する意志、表現する意志を感じさせた一枚だった。

総務省が8月28日、住民基本台帳に基づいて発表した3月末時点の人口動態調査によると、65歳以上の「老年人口」が初めて3000万人を超えた。日本山岳会の会員平均年齢は、67歳。完全に「老年」に入った山岳会が、訃報、追悼文主軸となりそうな会報をどう豊かにできるか、知恵が求められる。

平成25・26年度新役員紹介

前号に続き、着任された新役員の皆さんに自己紹介をいただきます。
①会員番号、②役職、③担当委員会、PT、WGなど、④好きな山域、登山スタイルなど

勝山 康雄(かつやま・やすお)

①8772

②理事

③資料・映像委員会、集会委員会

川瀬 恵一(かわせ・けいいち)

①14424

②理事

③遭難対策委員会、海外委員会、YOUTH CLUB

④北海道(特に天塩山系、東大雪、谷川岳、奥多摩など)クラ イミング、藪山歩き、トレイルランニングなど

人の行かないところに行つてみたい、そこにはどんな風景が広がっているのだろう。足跡のない真っ白な雪山や岩壁、いつもその一歩上を見続けてきました。

また研究・調査対象として山に関わっていた時期もあり、フィールドワークでは地形図や林班図を頼りに山中を踏破し、多くの動物や植物にも出会い、その後の登山の楽しみ方や安全管理について良

い経験になっていきます。

JACでは、本年春の組織改編により遭難対策委員会が設置されました。様々な登山活動をされている会員の皆様に有用な安全登山に関する情報提供や、セルフレスキューに関する技術講習を実施する準備を進めています。

これからも皆様のご指導の下、JACの発展と登山界の活性化に励んでいく所存です。

直江 俊式(なおえ・しゅんすけ)

①14775

②理事

③公益法人運営委員会、YOUTH CLUBのサポート

④沢登りがメイン。美しいナメがあれば、技量の範囲でどこでも

私が登山を始めたのは大学卒業後で、知識経験の量は他の役員と比べるべくもありません。そのような私が理事に推薦され、公益法人運営委員会の担当とされたのは、職業(弁護士)ゆえです。

日本山岳会との関わりは第1回の冬山入門教室に参加したことに始まり、その後も青年部構成員として活動しているため、理事の中でYOUTH CLUBにかなり近い位置にあります。

公益法人運営委員会もYOUTH CLUBも、日本山岳会の行く末に関わりますが、経験の蓄積に乏しく、予期せぬトラブルの発生が想定されます。役員のみならず一般の会員の方々のお力も借りつつ、職責を全うできるよう努力いたします。何卒よろしく願います。

野口 いづみ(のぐち・いづみ)

①12105

②理事

③医療委員会、科学委員会、YOUTH CLUB

④積雪期は山スキー、暑い季節は沢登り(今夏は上ノ廊下に行ってきました)、バリエーション、尾根、海外登山(ワスカラン、玉珠峰など登頂)など

2003年、理事になった時に、会員増を図るための講習会を提言しましたが実現しませんでした。最近ではYOUTH CLUBで講習会が行われるようになり、好ましい

ことと思っています。今後、すべての会員が享受できる講習も必要と考えます。そのためには、支部の活動を活性化することも有効だと思います。

また、女性役員が私一人では少なすぎます。今後、多くの女性が役員として活躍できるように努力したいと考えます。

なお、私は他に日本登山医学会理事、山岳文化学会の常務理事と山岳医学医療分化会の代表もしています。山の医学の領域でも、講習会などを通じて日本山岳会の公益活動に尽力し、会員増につなげたいと思っています。

山賀 純一(やまが・じゅんいち)

①14660

②理事

③「山の目」制定プロジェクト、YOUTH CLUB

④山梨県。社会人になって初めての赴任地でした。富士山、北岳、甲斐駒ヶ岳など、思い出深く魅力的な山々の宝庫です

早稲田大学山岳部を1990年に卒業しました。当時は各大学とも部員が少なく、日本山岳会学生部を拠点に、大学の枠を越えて山に登り、酒を酌み交わしました。

今回を機に、約20年ぶりにルームを訪れ、チョモランマ3国合同登山の梱包作業や、学生部の仲間と出かけた山行が懐かしき思い出されました。

登山をめぐる状況が時代とともに変わり、日本山岳会の姿も、私が学生だった当時と異なるのは、理事になつてわずかの期間でも感じられました。日本山岳会のあり方と、自分に何ができるのかを、焦らず、じっくりと考えていくつもりです。

昨秋まで大阪で勤務していました。その際に、この機会がなければまず行くことはないであろう六甲山や京都一周トレイルに通いました。普通のハイキングコースが、トレランシューズを履くとまるで違う顔を見せることに驚きを覚えました。

いくつになつても新しい喜びをくれる山。会員の皆さまと共に、この素晴らしいさをより多くの人に伝えていくことができれば幸いです。

山田 和人(やまだ・かずと)

①19909

②理事

③主担当…自然保護委員会、サポート…YOUTH CLUB、図書委員会、総務委員会
④妙高山・火打山、山スキー、山の植物観察

大学山岳部の出身ですが、これまで日本山岳会の活動にはあまり深く関わってこなかったため、勉強中の身です。

理事になつて幾つかの委員会の活動に触れ、あらためて日本山岳会の層の厚さに敬服しています。YOUTH CLUBの若い会員と、山岳会を支えていただいている多くの熟年会員が互いに刺激を受け合い、一緒に登山を楽しめるような山岳会のスタイルを作っていけたらと思います。

微力ながら精一杯やりたいと思いますので、よろしく願ひいたします。

浜崎 一成(はまさき・かずなり)

①11248

②監事

④穂高・上高地、白馬連峰

早稲田大学山岳部時代(昭和29年卒)は、やっと戦後復興が軌道に乗り出した頃であり、登山用装備も戦前の古いものを使っていまし

た。しかし登山活動は旺盛で、厳冬の槍ヶ岳北鎌尾根縦走や前穂北尾根から北穂へのボーラーシステムなどチーム登山におけるリーダーシップの重要性を実体験したことが、今でも鮮明に想い出されます。

私もすでに80歳を超え登山活動には限界を感じていますが、好きな山でスケッチハイクすることに生きがいを見つけています。

監事として後2年弱を残していますが、日本山岳会のブランドの意味の大きさからしても、一般社会における存在意義に値する運営理念・目標が何であるかを見極めていきたいと考えています。

吉永 英明(よしなが・ひであき)

①7045

②監事

④昔は、ブータンの奥地、ルナナに通いましたが、今は行き損ねた山を支部・同好会の方々と行くのが一番です

中学3年の1学期修了式の日、同じ町出身の日下田實さん(名誉会員)のマナスル初登頂の話を、5名の友人と隣町まで歩いて行つて聞いたのが興味の始まりです。

2013年度年次晩餐会について

総務委員会

本年度の年次晩餐会は12月7日(土)、品川プリンスホテルにて開催いたします。詳細は会報「山」10月号にてお知らせします。

『山岳』第108号 お詫びと訂正

『山岳』第108号の「大正2年夏、上高地」の記事中、P.136下段、右から12行目「日中戦争のときには」の文言を削除し、「これを裏付けるように、1932年4月1日付で——」に訂正します。14行目の「会報369号」は「406号」の誤りです。

また、P.144上段、右から1行目の「横浜の山手に住む」は、宛名の亀谷得太郎の日本山岳会入会時(明治41年)の住所で、大正2年夏には「東京市下谷区上根岸」に転居していました。筆者の誤りであり、お詫びし、訂正申し上げます。(関塚貞亨)

平成18年に着手した公益法人化は当初から携わっていましたが、平成23年度第1回総会での定款案に対する長丁場の対戦を、今では楽しく思い出しています。

公益法人化の選択は誤っていなかったと尾上昇前会長も述べておられますが、将来にわたつての帰趨は、第一にこれからの理事の方々にかかっていると思います。

会計の正確さを求めるのはもちろん、適正な業務執行を会員の目で見つめていく所存です。

メディカル

第33回日本登山医学会学術集会
グローバル社会と登山医学などをテーマに

医療委員会委員長 浜口欣一

去る6月15、16日、京都大学芝蘭会館において、会長・奥宮清人（京都大学総合地球環境学研究所）先生のもとで、第33回・日本登山医学会学術集会が開催された。一般社団法人化した最初の学術集会である。大会テーマは、「グローバル社会の登山を考える ―登山者と山の民との交響―」。このテーマに関して、会長は以下のごとく述べている。

「総合地球環境学研究所では、8年間の高所プロジェクトに参加し、地球規模で進行する高齢化と生活習慣病、それにもなう老化の変容を『身体に刻み込まれた地球環境問題』ととらえた。そして長年培われた高地への適応と近年の急激な生活様式がどのように影響しあうかを明らかにし、高地文明の未来可能性を『老人知』に学びながら、環境負荷の少ないライフスタイルや高地の人々の幸せな老いとよりよいQOLを追求してきた」。

この大会テーマに沿って、シン

ポジウム「高地・登山者・山の民の交響」では、会長により「山の民の身体に刻み込まれた環境問題」、穂刈康治氏（槍ヶ岳山荘グループ）による「北アルプス槍ヶ岳における登山者との交響」、安成哲三氏（総合地球環境学研究所所長）による「ヒマラヤの上昇と人類の進化」という講演がなされた。また特別講演として大塚邦明氏（東京女子医科大学）が、「時間医学からみた山の民」を話された。

2日目の午後には、市民公開講座「登山者と山の民との交響」が組まれ、松林公蔵氏（京都大学東南アジア研究所）による「高所順化（Acclimatization）」と高所適応（Adaptation）」、斎藤惇生氏（元日本山岳会会長）による「ヒマラヤ登山と高所住民との交流…歴史的考察」という講演があった。

一般演題は、山岳診療、高山病、高所生理・トレーニング、登山におけるsecurity、ニューギニアおよびヒマラヤ高地、低温環境の影



次々と演者の発表が続く

響、水分状態など7つに分類され、合計36題もの発表があった。一般演題も以前から比べると、平易な言葉での発表が多かった。なお当日の学会参加者は165名、市民公開講座参加者は52名であった。以下、筆者が興味を感じた演題について、幾つかご紹介する。

奥宮清人会長講演

「山の民の身体に刻み込まれた環境問題」

テーマの背景には、人口の高齢化とライフスタイルの変容に伴う生活習慣病の増加の、地球規模での進行がある。グローバル化のフロンティアと考えられている「高

地」において、低酸素環境に対する人間の生物学的な適応と厳しい自然に対する文化的適応が、どのような相関をもたしているかを明らかにすることは、今後の地球環境問題を考えるうえで重要である。人間と自然の密接な共生システムが、その特殊環境ゆえに残る高地においてさえ、現在は急激な生活様式の変化が起こっており、それが人間の疾病・老化に多大な影響をもたらしている事実が明らかになってきた、と述べている。

このような背景のもとに、高所環境に対する人間の医学生理的適応と、「高地文明」とも呼び得る生態・文化的適応を明らかにし、近年の生活様式の変化がいかに高所住民の生老病死におけるQOLに影響を及ぼしているかを明らかにすることに、地球環境問題に向けた高所ならではのモデルや知恵を提示することを目的とした。対象地域はチベット、ブータン、ラダックなどで、高地文明の生業と経済の比較、生態の違いに適応した農林牧の戦略、生業と交易により地域のみでなく広域の異なる生態を結びつけた「つながり合うこと」の知恵と意義が明らかにさ

れた。その結果として、国際関係、開発政策、市場経済化の影響で変容しつつある高所住民のライフスタイルと健康の関係が明らかになった。そして農・牧外労働、高齢化、低酸素適応のトレッドオフによる生活習慣病の増加を示した。

チベット人は低いヘモグロビン濃度で適応できる遺伝子を多く獲得してきたことにより、若い時には慢性高山病や糖尿病に予防的であるが、加齢に伴い多血症、糖尿病への脆弱性が生じ、それが酸化ストレスの高値とライフスタイルの変化を促進し、「糖尿病アクセルモデル」の背景として「低酸素適応遺伝子の老化に伴うトレッドオフ仮説」を提唱された。

そして今後の課題として、長年培われた高地への適応と近年の急激な生活様式の変化がどのように影響し合うか、高地文明の未来可能性を「老人知」に学びながら、環境負荷の少ないライフスタイルや高地の人々の幸せな老いとよりよいQOLを追求し、我々のライフスタイルに逆照射し、中山間地の問題、地域のネットワークを活かした高齢者の生活習慣病、認知症うつなどの予防に活かしていきたい

い、と語られた。

含蓄のある、将来の我が国の行く末を暗示させる講演であった。

大塚邦明氏（東京女子医科大学東医療センター・時間医学老年総合内科講演）

「時間医学からみた山の民」

ラダック（インド）の中心都市レーと、辺境の41集落の地域住民を対象とした調査である。この地域は、気圧が低く、低酸素で、昼夜、夏と冬の温度差が大きい。日照・紫外線、衛生状態が良くないという環境である。心臓病や脳梗塞が多いだろうと予測し調査をした結果、冠動脈疾患は2割と少なく、心房細動という脳梗塞の原因となる不整脈例は認められなかった。頭痛の訴えは多いが、脳梗塞・脳出血は少なく3割であった。メタボリック症候群の頻度も少ない。なぜこれほど健康なのだろうか。それには、ラダック特有の生体リズムがあった。

生体リズムの研究は急速に進歩し、リズムが乱れると高血圧、肥満、糖尿病、不眠や抑うつ、不登校や慢性疲労症候群になり、また癌が誘発され、いろいろな病気の

源であることが判ってきた。

地球に棲む生物は、生命の中心を刻む時計を持っている。夜が来ると眠くなり、朝になると目が覚める。自律神経やホルモンの働き、体温や脈拍数、血圧など、夜と昼のメリハリをつけて約24時間周期で規則正しく、リズムカルに変動を繰り返している。この生体リズムを司っているのが「サーカディアンリズム」である。

サーカディアンリズムの「時計」は、視床下部視交叉上核に存在する。ここは時計細胞で満たされ、時計細胞の中に時計遺伝子がある。時計遺伝子に変異があると、リズムの周期や振幅が変わって、サーカディアンリズムが消失する。サーカディアンリズムを発信する遺伝子機構の中心は、6個の時計遺伝子である。

ラダックに住む住民に重力センサーと体位記録計を用いて、一日の活動量の変動リズムを解析した。その結果、70歳を超える高齢住民でもサーカディアンリズムが維持されていた。商店を営む老人だけでなく、一定の場所に定住しない遊牧民の老人にも、サーカディアンリズムが観察された。このこと

は、厳しい低酸素と低い気圧という過酷な環境と風土に適応し、長い年月をかけて生物時計を築き上げてきたことが推察される。

ラダックでは人々が自然とともに暮らしていることに利点がある。夜は深い暗闇の中で眠る。自然が創り出している環境で、質の高い深い眠りを得ている。高所低酸素環境に由来する昼間の著しい交感神経活動亢進、夜間の深い睡眠にともなう十分な副交感神経活動の賦活、そのメリハリが創り出す大きく増幅された生体リズム、これらが住民の健康の秘密であった。

斎藤惇生氏（元日本山岳会会長）講演

「ヒマラヤ登山と高所住民との交流…歴史的考察」

同氏は、数々の海外遠征隊に参加し、医者であるので、医療を求める高所住民とは他の隊員以上に密接な関わりを持たれたため、各遠征隊で経験したことを、エピソードを交えて、懐かしそうに話された。正に学会長がテーマとした「登山者と山の民との交響」の神髄を語られ、聞く側も深い感銘を与えられた。

Topic

羽田栄治さん、「お別れの会」開催される

アルバインフォトクラブ代表 川嶋新太郎

7月3日(水)、西新宿・ヒルトン東京において「お別れの会」が開催された。開会の午後6時には260余名の参集があり、羽田さんを偲ぶ交友関係の広さを感じられる会であった。

会場正面の祭壇には白菊に囲まれた御遺影、そのもとには皇太子殿下・妃殿下より賜わった白菊の花籠が、羽田さんの逝去を惜しむように供えられていた。

祭壇の左右には檜ヶ岳山荘、燕山荘、双六小屋、中央大学OB山岳会、山松会、日本山岳会資料映像委員会、日本山岳会アルバインフォトクラブ、日本山岳写真協会、山岳写真集団、(株)山と溪谷社、日本カメラ社などの供花が並供されていた。

司会・尾崎友保氏(日本山岳写真協会理事)により故人の冥福を祈り黙祷で開会。発起人・田沼武能氏(日本写真家協会会長)より、「羽田さんとは同じ時代を過ごしてきました。羽田さんにはもっと長生きしていただき、札幌・東京

オリンピックのような映像を撮ってほしかった」との挨拶と弔辞があり、続いて、各位が次のように話された(敬称略)。

白川義員(写真家)・・・「16年ほど前、私の映像作品『南極大陸』がNHKドキュメンタリー番組の最高賞を得たが、その推薦者の一人が羽田さんでした。感激だった。格調高い作品を撮り続けた羽田さんの存在は素晴らしかった」。

森武昭(日本山岳会会長)・・・「日本山岳会資料映像委員会が羽田さんは献身的活動をされた。『写真で見る日本山岳会』の100年は秀逸で、全会員に配布された」。

川崎深雪(株)山と溪谷社副社長)・・・祖父・川崎吉蔵、父・川崎吉光を通じて親しくさせていただいた。この秋には、羽田さん執筆の書籍出版の予定があっただけに、残念です」。

伊藤正一(三俣山荘)・・・「羽田さんとは1948年頃三俣山荘で出会った。その時、山岳写真の現在・未来を情熱的に話していた。当時



御遺影のもとには、皇太子殿下・妃殿下より賜わった花籠

20歳だった青年は、その後、日本山岳写真協会副会長、会長となった。会全体を見据えた尽力に感謝したい」。

黒川恵(日本山岳会副会長、中央大学山岳部OB)・・・『大学山岳部創立80周年記念誌』と一緒に作った。たくさん資料、原稿、記事、挿入写真を手際よく整理、さすがプロの技と感服した」など、羽田さんの人柄が偲ばれる弔辞であった。

施主・羽田富士子夫人より参集の方々へ、「良い仲間との出会いは人生最大の財産だと常々申していました」との挨拶があり、ご長男の登志男氏は「父の病名が原発性不明癌と診断され入院、自宅療養

中、4月2日に容体が急変、再入院の4月3日、意識不明中に突然『カメラ、カメラ』と声を出し、シャッターを切る指の動き。本当に記録映像の人生だった」と語った。

神崎忠男(日本山岳協会会長)は献杯の前にひと言、「日本山岳会創立100周年記念冊子『写真で見る日本山岳会』の100年」出版にあたっては資料収集、原稿執筆、編集など羽田さんの尽力・努力の結果、立派なものが出来た」と話し、大声で冥福を祈り献杯。

会場のスクリーンにありし日の羽田さんの映像が映し出されるなか懇談、会食。近郊および遠方から参集の皆さんが羽田さんとの思い出を語り合い、同窓会のような雰囲気となった。

懇談中に、大石直臣(写真文化協会会長)、三宅修(写真家)、岡利昌(開成山岳部OB)、小山田修(日本山嶺倶楽部)の4氏より一様に、羽田さんとの出会い、人柄、活躍ぶりなど思い出深く逝去を惜しむ弔辞が続く、閉会予定を20分も超過。「名残はつきませんが、これにて閉会致します」と、日本山岳写真協会副会長・橋本勝氏の閉会の辞で終了した。

N

東西南北

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

山名一考

筑木力

越後湯沢と水上の境にある七ツ小屋山(1675^メ)の、山名の由来を調べてみた。

有力な説は、「昔、陸地測量部がこの辺りを測量中、天幕を7つ張って作業をしたことから、天幕が小屋になった」とするもので、『越後の山旅』(藤島玄著)、『日本山名事典』(徳久珠雄、石井光造、武内正編)、『新日本山岳誌』(日本山岳会編)がこの説をとっている。だが藤島は、天幕が7つとは考えにくく、いとして疑問を挟んではいる。

一方、『山名考』(池田光三著)はこれに異説を唱える。「昔、ここに寝泊りする獵師のシシ小屋があった。シシとは猪、鹿、羚羊(かもしか)のことで、一般に山に棲む大きな獣をシシと総称した。この

シシがシチに訛り、さらにナナになって、シシの小屋が七ツ小屋」という今の呼称が生じたのではないか。往古、いかに清水峠の往来が頻繁だったとしても、この峠に小屋が7軒もあったとは考えられない」と主張する。シシがシチと訛ることはよくあるし、シチ(漢音)がナナ(和音)に代わったことも首肯できる。でも、当時作ったのは作業用の小屋掛けで、普通の天幕ではなかったのではないかと、私にはまだ疑問が残った。

そこで、天幕説の真偽を確かめようと思い、国土地理院に問い合わせしてみた。すると係の人が、大正13(1924)年と昭和4(1929)年発行の5万分の一地図を調べてくれて、そんな事実があったかどうかは定かではないという。そこでさらに、地元の湯沢町役場産業観光課にも問い合わせたが、



まろやかな山容の七ツ小屋山

やはりわからなかった。

ただ、シシ小屋の頭(1473^メ)と呼ぶ突起が、十五里尾根から沢を渡った地点、大源太山(1598^メ)と七ツ小屋山を結ぶ稜線の西側の接点にあるのは確かだ。何か関連がありそうだが、結論は見いだせなかった。ちなみにこの大源太山は、湯沢町と南魚沼市にまたがる。その雄大豪壮、険阻な山容に対する畏敬の念からこのように呼ばれたもので、江戸時代の文献にも記されている。これは、『新日本山岳誌』に執筆の南雲克良(湯沢在住、当会会員)の解説である。

さらに、同名の山(1764^メ)

が、平標山と三国峠の境界尾根の間にあるのもややこしい。まるで、同姓同名の2人が近所で暮らしているようなものだ。源太とか源太郎とかいう名前は、筋骨たくましい力強い男性を連想させる。これにも何か由来がありそう。

人は畏敬、憧憬、親愛などの念から山に名前を付けた。山名は、山岳文化の宝庫なのだ。

付記…この稿を書き終えたとき、雑誌『山』(昭和23年11月号、河出書房)を入手。七ツ小屋山の名の由来について、深田久弥がシシ説をとっていることを知った。

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

越後支部

第56回高頭祭と弥彦神社より
感謝状授与

越後支部恒例の第56回高頭祭が、
7月25日に弥彦山大平園地の高頭
仁兵衛翁寿像碑前で盛大に開催さ
れた。今年度は、来賓として日本

山岳協会神崎忠男会長（元日本山
岳会副会長）をお招きし、さらに日
本山岳協会八木原園明副会長（日
本山岳会群馬支部事務局長）と、日
本山岳会四国支部尾野益大支部長
にも駆けつけていただいた。越後
支部会員および関係者を含め、約
70人という過去最高の参加者であ
った。

14時30分に桐生恒治事務局長の
開式宣言で始まり、橋本正巳支部
長が「新潟地方はまだ梅雨明けし
ておらず、夜半から朝方まで集中
豪雨で心配していたが、過去の長
い歴史の中で高頭祭は一度も雨天

中止になったことはない。やはり
高頭翁の御人徳であると思う」と
挨拶を述べた。そのジンクスどお
りに、開催時には陽も射し始め暑
さを感じるほどに回復し、大平園
地では海からの涼風も吹く絶好の
式典日和となった。

まず、平田大六支部名誉会員に
よる神事で始まり、恒例の本職神
官並みお祓いの祝詞をあげてい
ただいた。玉串奉奠は橋本支部長、神
崎日山協会長、阿部信一県山協会
長をはじめ10名により厳肅に執り
行なわれた。その後、お酒を好ま
れた高頭翁に対し、矢尾板奈々子、
根津洋子、佐竹秀子氏ら支部女性
会員がご献酒を行なった。

一連の式典終了後、14時50分よ
り、神崎日山協会長から「日本およ
び世界の登山界」という内容で記
念講演をしていただいた。神崎会
長から貴重な参考資料を用意して
いただき、日本の登山界（日本山



盛大であった第56回高頭祭

岳会や日本山岳協会などの違い）
や、世界やアジア地域の登山組織
などをわかりやすく説明をしてい
ただいた。講演では、「日本におい
て、1千万人とも言われている登
山人口に比べて、山岳会や山の会
等の組織に加盟している人口が1
割（10万人）程度である。他の99
割の人は未組織登山者であり、
今後、このような人たちをどのよ
うにして取り込むかが課題になっ
てくると思われる。特に、若者の
加入を募って、組織の若返りを進
めていかなければならない」と力
説されていた。

その後、寿像碑をバックに全員
で記念撮影をして近くのあずまや

に移動、越後の地酒を味わいなが
らの歓談となった。ちょうどこの
時突然の夕立雨となったが、幸い
なことに高頭祭行事もすべて終了
しており、非常に幸運であった。

16時30分、弥彦山頂の奥ノ院に
移動し、御神廟前にて開催される
新潟県登山祭に参加した。17時よ
り、弥彦神社神官による「登山安全
祈願祭及び松明登山清め祓い」が
執り行なわれ、こちらは新潟県山
岳協会、並びに傘下の山岳会代表
による玉串拝礼が行なわれた。18
時30分より、参加者はそれぞれ弥
彦山頂から松明を灯して麓の弥彦
神社を目指して下山開始する。日
山協の神崎会長グループは、先に
下山して弥彦神社境内で合流する
こととした。

20時、弥彦神社社殿にて松明行
進隊のお祓いを受け、ボイススカ
ウト鼓笛隊の先導のもと、約30
0人強の男女岳人による松明行進
を開始した。多くの参拝者で賑わ
う神社参道を出発し、幻想的な松
明の火を持ちながらの行進に、沿
道のお神輿隊も一時停止して拍手
で迎えてくれた。夜空に舞い上が
る花火を見ながらの楽しい時間
であった。弥彦駅までの約1キ
ロメートル強

の行進を終え、松明を納めた後、近くのホールで慰労会が行なわれた。第60回の松明登山を記念して、弥彦神社より日本山岳会越後支部に對し感謝状が授与された。

翌26日、日山協神崎会長と八木原副会長は、橋本支部長の案内で新潟市の藤井信越後支部名誉会員（元新潟県山岳協会会長）宅を慰問され、久しぶりの対面をされた。その後、長岡市深沢町の正林寺（高頭家菩提寺）にご足労いただき、本間宏之副支部長の案内で高頭翁の墓参をされ、長岡駅から無事帰京された。

なお、尾野四国支部長は、24日に四国徳島から車を運転して新潟



弥彦神社より授与された感謝状

まで来られた。そして25日、高頭祭に参加。翌26日、浅草岳（1586m）登山のため車で現地向かわれた。そのハードスケジュールをこなす行動力に敬意を表したい。今回の高頭祭に遠路駆けつけていただいた、日山協神崎会長、同八木原副会長、四国支部の尾野支部長に紙面を借りて感謝を申し上げます。

（桐生恒治）

千葉支部

初の海外遠征——台湾 雪山 「絆と心で全員が登頂」

7月9日午前6時35分、快晴。気温4度。台湾北部にそびえる雪山、標高3886mの頂に、メンバー11名全員が立った。日本山岳会千葉支部が実施した、支部発足6年目にして最初の海外遠征登山は成功裏に終わった。

雪山山脈は、台湾を南北に走る全長約260kmの山脈だ。雪山は、雪山山脈の最高峰であり、台湾全土でも玉山山脈の主峰・玉山（標高3952m）に次いで高い標高を誇る。

山登りは、どんな山に登ろうが、



雪山頂上にて

どんな登り方をしようが個人の自由だ。だが今回は、念願の渡航を目前としながら体調を崩して涙をのんだ数人の仲間のためにも、「仲間の分も全員が無事で山頂の土を踏もう」と結束を誓い合った。こうして今振り返ると、つらく苦しい登りも励まし合い、文字どおり「絆と心」で歩き通すことのできた5泊6日の山旅だった。

「手始めに台湾の山がいいね」。山行委員会を中心に、支部が5周年を迎えた昨年夏、この遠征が決まった。当初は「玉山」だったが、現地の事情で、急遽、雪山に変更となった。「途中でバテたら恥ずかしい」と、酒飲みは酒量を減らし、

メタボ組は涙ぐましい減量を続けた。それぞれが富士山で高度に慣れる訓練も行った。

こうして、7月7日七夕の早朝、一行は成田空港から飛び立った。到着してからは専用バス。台北市街を走り抜ける。どの民家の屋上にも丸いタンクが載っている。飲料水なのだろうか。川幅の広い河川敷を利用して、俵のようなスイカを栽培していた。「わー、スイカ畑だ」見慣れぬ光景に、みんな大喜びだ。

3日目の午前2時。標高約3100m付近に建つ三六九山荘は暗

闇の中。外に出ると、天の川が南北に流れていた。「きれいだね」「見せてあげたかったね」。

出発は午前3時。それほど寒さを感じない。徐々に高度を上げていく。夜の闇が白くなってきた、樹林帯の中を歩いていることに気付いた。標高は3500mを越えている。「森林限界が高いな」。あとで調べてみると、「ニイタカトドマツ」の純林だという。

森に一筋の光が差し込んだ。神々しい夜明け。オレンジの光が水平に広がり、カールが見えた。その後、抜けるような青空の下、私たちは山頂を踏んだ。

明日は帰国という11日夜、中華民国山岳協会とのレセプションが開かれた。雪山登山隊の総隊長を務めた吉永英明会員は、「台湾の山岳協会と日本山岳会との交流の歴史は長い。日本へ来たときには、ぜひ千葉へ立ち寄ってほしい」と挨拶。我々をサポートしてくれた中華民国山岳協会の何中達会長も、「全員そろっての登頂、おめでとうございます。来年はぜひ玉山へ登って下さい」と笑顔を見せていた。

(三木雄三)

東九州支部

スズタケ枯死とシカの食害調査

祖母・傾山系のスズタケ枯死に関する調査を、支部の公益事業として取り上げて、その具体的方策等を検討していた。そこに、大分県植物研究会が県の依頼を受けてスズタケ枯死とシカの食害に関する調査をほぼ同じ場所で行なうとの情報が入り、同会の指導者である生野喜和人さんとコンタクトをとった。すると、調査は始めたばかりであり、ぜひ共同作業をしようということで、トントン拍子に話が決まった。

6月1日(土)、共同作業の第1回目が行なわれた。参加したのは当支部の参加者が7名、生野さんグループが7名である。宮崎県との県境にある尾平トンネル出口から稜線に登ると、祖母・傾縦走路の旧尾平越で、そこから約1時間半ほど本谷山の方へ登ったところに大分県環境企画課が設置した定点観測地がある。1カ所はシカが侵入しないように25m四方の範囲をネットであ囲っており、それに接したもう1カ所は全く囲いのない、



スズタケ調査に初挑戦

目印のポールだけが立っている25m四方の観測地点である。

見るとネットの中のスズタケやノリウツギなどの新芽は元氣よく伸びているが、囲っていないところのスズタケの新芽の部分がほとんど食べられ、他の木々の新芽も低いところはみんな食べられているのが分かる。

調査のやり方について我々は全くの素人なので、調査専門のスタッフに要領を教わる。調査地点内を5m四方のマスに切って、その中をまた25m四方のマスに切って、そのマスの角にあるスズタケの延び具合をメジャーで1本ずつ計るという、実に根気の要る仕事であ

る。ネットに囲まれた中の観測調査に1時間半を要した。そして昼食タイム。午後1時間半かけて今度はネットのない観測地点を、同様にマス目を切ったスズタケの背丈の計測である。

何回か定点観測する中で得た、こうした計測結果から、シカの食害とスズタケ枯死の因果関係の有無などを推測しようというもので、次回は秋に実施の予定である。

(飯田勝之)

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

自然保護委員会

2013年度自然保護全国集会「立山・弥陀ヶ原の自然に学ぶ」

7月6・7日、恒例の行事である自然保護全国集会が、富山支部の協力を得て立山の地で開催された。集会前日の5日、梅雨末期の大雨で常願寺川には濁流が渦巻き、参加者の足に一抹の不安を抱かせたが、翌6日は天気も回復し、集会前に行なわれる支部報告の時には、ほとんどの参加者が会場の立山国際ホテルに到着していた。

集会1日目の6日、最初は日本山岳会各支部自然保護委員会による支部報告が行なわれた。鹿の食害調査などの調査活動、森づくり活動、登山道の整備・点検、清掃登山、自然観察会などの報告があった。それぞれの地域性を活かした活動には、真摯に自然保護を考

えていこうという各支部自然保護委員会の意欲がうかがわれた。

そしていよいよ、全国集会が始まった。まずはJAC節田副会長による開会の言葉があり、地元からの来賓として出席いただいた舟橋立山町長、富山市の山城市民生活部次長の挨拶と続く。特に立山町長は、地元自治体として立山黒部アルペンルートへのバス排ガス規制条例制定に向けて取り組んできたことについて話をされ、自然環境保全への前向きな姿勢をアピールされた。

次は、集会のメインである基調講演だ。2名の演者から、私たち登山愛好者にとって興味を惹くテーマが語られた。まず1つ目のテーマは、「立山連峰の積雪と氷河」。立山砂防カルデラ博物館で、長年研究にあたってきた飯田肇会員らがGPSを使って小窓、三ノ窓、御前沢の3つの雪渓が氷河であるこ

とを確認したという研究報告である。これまでも日本には氷河があるかもしれないと、何度もささやかれてはきたが、GPSというハイトク機器の登場によって、ついにそれが証明されたのである。会報「山」809号にも概要が掲載されているので、会員の多くはすでにご存じかもしれないが、実際に研究調査を行なった本人からじかに話を聞くのは新鮮であった。

2つ目のテーマは、「弥陀ヶ原自然と歴史の今昔」。立山・弥陀ヶ原をはじめとして、このあたりの歴史や自然に造詣の深い環境省自然公園指導員・佐藤武彦氏のユーモアに富んだお話である。まずは



基調講演に聞き入る参加者

立山のシンボルが昔はライチョウではなく、開山伝説に登場する白鷹と熊だったという話から始まった。その立山の歴史についての蘊蓄に耳を傾ける。玉殿岩屋、立山登拝路の歴史、弥陀ヶ原の自然、立山の雪など……様々な立山と弥陀ヶ原の文物がプロジェクトの映像を示しながら語られた。演者も聴衆もすっかり引き込まれ、気がついなら予定時間を10分以上オーバーしていた。

続くプログラムは「湿原の自然と保護」、「ライチョウの生態と保護」、「信仰登山について」、「持続可能な自然環境の管理について」と、立山・弥陀ヶ原に関係の深い4つのテーマごとにグループを作つて、参加者全員が語り合うグループ討議である。富山支部の鍛冶会員が討議の参考となる話をしたあと、グループごとにテーブルを囲んで活発な議論が行なわれた。討議終了後に各グループのリーダーによる総括が行なわれたが、どれも深い話ばかり。参加者の意識と関心の深さが感じられた。

夕食を兼ねた懇親会は和気藹々としたものになった。なかなか会うことのない各地方の支部会員同

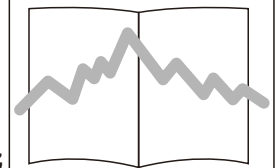
士が、自然保護のことや自分たちの活動のこと、山のことなどに花を咲かせ、2時間があつという間に過ぎていった。

翌7日、3つのコースに分かれてのフィールド・スタディである。大粒の雨が降ったりやんだりの不安定な天候の中、室堂平コースと弥陀ヶ原コースの2パーティーはケーブルカーとバスを乗り継いで、山の上に向かった。条件が悪い中ではあったが、ガイドをしてくれた富山支部会員のおかげで、それぞれに大きな収穫を得ることができたようである。正午ごろと、早めの解散となったが、この天候ではそれも致し方ないだろう。

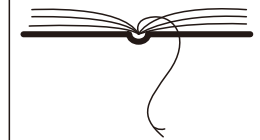
博物館見学コースは、天候に影響されることはほとんどなく、県立立山博物館とその近くにある芦峠寺の立山信仰の遺構、さらに立山カルデラ砂防博物館をめぐった。いずれも、ふだん立山に登りに来る時には見ることのない別の立山の姿を垣間見て、刺激を受けることになった。

短い日程ではあったが、参加した会員は充実した2日間を過ごしたに違いない

(近藤雅幸)



図書紹介



野口いづみ・著

『実例から学べる！ 山の病
気とケガ』



2013年7月
山と溪谷社刊
A5判 112頁
定価 1680円

著者は国内登山、山スキー、沢登り、そして海外登山を盛んに行なっている現役の麻酔科医で、当会の理事でもある。講演会に招待されることが多く、執筆の動機は、登山者が何を知りたがっているのかわかり、それに応えるような本作りを思いついたのだという。

自分が蓄えてきた知識や、山で直面した医療の実際を、一般登山者が理解しやすいように、かつ実践に役立つように解説している。全ページカラーで、たくさんの著者自筆のイラストと写真が理解を

助けている。

1章…登山で起こりやすい病気。高山病には多くのページをさいている。熱中症や低体温症をどのようにに予防するかなども役に立つ。落雷の避け方も興味深い。

2章…登山で注意する内科的病気。心臓の病気、脳卒中、糖尿病など高齢者は必見。下肢静脈瘤・肺塞栓症(エコノミー症候群)、胃腸のトラブルは改めて知ることが多い。

3章…登山のケガ。ケガ全体を項目別に要点を押さえて紹介している。足のつりや、虫やハチ刺されは日常生活でも役立つ。心肺蘇生法もイラスト付きでわかりやすい。

4章…登山の実際。バテないための歩き方とストレッチ、水分と食べ物の摂り方、女性、子供、中高年者などの特徴も紹介している。初心者からベテランまで納得するだろう。



足がつつたら足首と指先をつかみ、指先を身体側に倒すようにします。(66頁イラストより)

5章…登山に効果的なトレーニング。最新の知識を示す体力づくりの話は教唆に富む。登山のためのトレーニングが思わぬ効果を生む話も興味深い。携行医薬品とグッズ一覧も役立つだろう。

また、本文中の写真入りの多くの「実例」、「医療ミニ知識」、「用意したいもの」など、各章にわたって読み手を意識した構成になっており、最後まで一気に読みたくなるだろう。巻末には索引があり、便利だ。

内容はコンパクトながらエッセンスを網羅しており、豊富だ。イラストと写真を眺めるだけでも楽しめる。登山に携行をお奨めするとともに、日常生活でも役立つだろう。

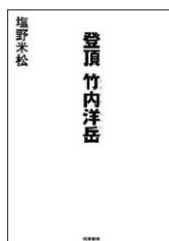
(南井英弘)

竹内洋岳・著 『標高8000メートルを生 き抜く 登山の哲学』



2013年5月
NHK出版刊
新書判 208頁
定価 777円

『登頂 竹内洋岳』 塩野米松・著



2013年6月
筑摩書房刊
四六判 248頁
定価 1680円

ついに登りきったのである。8000以上の14座登頂、その竹内さんの本が相次いで出版された。まずは彼自身の声を聞きたい。「一人のプロの登山家として、少しでも高所登山の魅力を知ってもらいたい。そして、本来だれもが持っているはずの挑戦を続ける喜びをもう一度取り戻してもらいたい」これがこの本を書くことになった彼の願いだ。

気がついた時には、自分の人生の中に山があったと言う彼の山登

りは、次第に組織的な登山隊では登頂できた喜びを素直に表現できなくなる。少人数でチームを組む国際公募隊に参加、登山という非日常的な空間そのものを楽しめた経験は新鮮な驚きだった。彼は登山が、「組織」から「個人」へと変わり、自分の実力とスタイルで、頂上を目指す時代が来たと思った。登山の世界で生きていく覚悟が決まると、その意思表示として、プロの登山家を宣言して、14サミットプロジェクトを立ち上げる。

自分は人並み外れた心肺機能や運動能力を持っているわけではない。困難な挑戦を成し遂げようと思ったら、自分の体からいかに力を引き出すか、死をいかに避け、安全に頂上にたどり着き下山するか、それを考える。そのために最先端のツールを追求する。それは安全性を確保し、新たな能力を発揮させる。より困難で高度な課題に向かっても、経験に頼らない。二度も死の淵をさまよい、その生と死を分けるのは「想像力」だと言う。彼は、組織ではなく個人でビジネス社会をのぼりつめる若いビジネスマンのようだ。

本書は第1章「もっとも宇宙に

近い場所」から、第6章「危険を回避する想像力」まで、死の地帯で繰り広げられた高所登山のドキュメンタリーとしてだけでなく、現代社会での成長の物語として読むことが出来る。

さて、次の一冊『登頂 竹内洋岳』は、名人の手による『初代 竹内洋岳に聞く』（同時に筑摩書房から文庫化された）の続編。14座完全登頂への挑戦と記録達成までを追うノンフィクションである。著者のロングインタビューと、竹内さんの人柄そのままのブログを中心にライブ感にあふれている。

「14座を登りきります」と宣言した「プロ登山家」とアマチュアの違いは、心構えの違い、覚悟の持ち方だ。自分が登れる登れないを自分で確かめ、自分の判断で自分自身を守る。そして自分の力で登っていく。それが彼の登山をつくってきた。14座は、実は14の個性を持った一つひとつの山で、それを登り続けてきただけのことなのだ。著者は言う、「8000以上の山の上にたった一人、自分しかない。考えや思いは分かち合えるが、肉体は分かち合えない。登山は、自分に対してのスポーツなのだ」と。

二冊とも一気に読み終えた。夏の山を終え読書の秋、山に向かう姿勢を正し、確実に新しい価値観の登山の扉が開かれたと知るためにも、ぜひ読んでほしい。

竹内さんは山に対する類稀な倫理観の持ち主だ。だから彼の登山はすばらしいと私たちは感じるのである。『初代 竹内洋岳』は確かに次代に突入した。

そしてもう一冊、竹内さんの本『頂きへ、そしてその先へ』が、8月29日(東京書籍)発売された。

(絹川祥夫)

渡辺隆・編著
『山の履歴簿 山と人の関わり』
第一巻 北海道西南部



2013年4月
北海道出版企画センター刊
A5判 456頁
定価 4725円

北海道は山国である。本書は、文献や地図に掲載されたすべての北海道の山(ヌプリ、シリ、岳、峰、峠と表記されるもの)について、山名由来、語源(アイヌ語源にこだわりのながら)や人との関わり(登山史、生活、産業など)を、データベースとして残そうとの企てだ。著者は、全4巻に北方四島やサハリン南部を含め、3100座を網羅するという壮大な構想に取り組んでいる。本書は、その第一巻で、北海道南部西編、約1000座を取り上げている。

第Ⅰ編・南西部山域の特徴の言及に始まって、第Ⅱ編「山の履歴」が圧巻。島嶼も含めて1000座の地図上の位置、山容、山名の由来、語源(アイヌ語源が正確に判明するものは30%程度とのこと)、山名掲載(初出)資料名、登山史など、

1頁に3〜5座が解説されている。掲出文献が多い山や、知名度の高いピーク(例えば羊蹄山・マツカリヌプリ)については、掲出資料の引用に多くのページが割かれている、とても興味深く読める。

第Ⅲ編「山小屋と登山基地」は、大正末〜昭和初期の旧駅通や外国人教授の設計で建てられた大学のヒュッテ、スキー登山と観光振興のために旧国鉄が開設したものや皇族の寄付、林野局が造ったものなど、北海道の山小屋の多様な歴史が語られる。すでに明治37年に、羊蹄山の九合目に観光・登山者のための山小屋が建てられたとのこと。現在も継承されている小屋が多いのも北海道の登山興隆ぶりを物語る。

第Ⅳ〜Ⅴ編「登山記録」「遭難事故」は、北海道には熱心な登山史研究者が多く、すでに優れた刊行がされているが、第Ⅵ編「炭鉱・鉱山・森林鉄道」は、明治以降第2次大戦後の復興期まで操業していた炭鉱や鉱山の最盛期の様子や朝鮮人労働者や勤労報国隊の半強制労働など含め閉山の経緯までがコンパクトに語られていて、産業史の一端と言えるし、北海道の山と人

を語る上で欠かせない項目だろう。巻末には、参考文献、地図が10ページにわたって載っている。古くは林子平から菅江真澄、谷文晁、松浦武四郎、知里真志保や、戦前の鉄道省旅行案内書に至るまで、著者の資料渉猟ぶりに圧倒される。北海道に住んだことがある私としては、こうした総覧をすっきり読みふけてしまおう。『山名辞典』とは違った味わいがあるからだ。愛読者としては、初出文献は抄録でも出来るだけ載せてほしい。

「山の履歴」の章の一層の充実をお願いして、続刊を期待したい。

(松澤節夫)



図書受入報告(2013年8月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
松本市立博物館(編)	北杜夫と松本：松本まるごと博物館連携企画展 展示解説図録	95p/30cm	松本市立博物館	2013	発行者寄贈
野口いづみ	実例から学べる！山の病気とケガ	112p/21cm	山と溪谷社	2013	発行者寄贈
五十嶋一晃	立山ガイド史	779p/21cm	五十嶋商事	2013	著者寄贈
山森欣一(編著)	唐沢岳幕岩：山嶺登高会創立50周年記念	221p/26cm	山森欣一(私家版)	2013	著者寄贈
塩野米松	初代 竹内洋岳に聞く(ちくま文庫 No.し-34-5)	542p/15cm	筑摩書房	2013	竹内洋岳氏寄贈
塩野米松	登頂 竹内洋岳	248p/19cm	筑摩書房	2013	竹内洋岳氏寄贈
Sean Isaac (ed.)	The Canadian Alpine Journal 2013 (Vol.96)	156p/28cm	The Alpine Club of Canada	2013	発行者寄贈
Rajesh Gadgil (ed.)	The Himalayan Journal 2012 (Vol.68)	356p/22cm	The Himalayan Club	2013	発行者寄贈

■8月の理事会は夏休みのため休会でした。

ルーム目誌 8月

1日	家族登山普及WG
5日	二火会 学生部 スキークラブ 高尾の森づくりの会
6日	休山会
7日	自然保護委員会 常務理事
8日	TH CLUB
8日	山岳地理クラブ
19日	総務委員会
20日	00会 家族登山普及WG
21日	スケッチクラブ
22日	青年部 つくも会
23日	学生会 公益法人運営委員
26日	会 山遊会
27日	東京多摩支部
	YOUTH CLUB
	資料映像委員会 DM委員



会員異動(8月分)

物故

松永康子(5333) 13・8・21
井上 晃(5789) 13・8・19
西川 潔(12727) 13・8・10

退会

渡辺純一(3463)
前田隆司(10365) 京都・滋賀
池崎浩一(10432) 熊本
永田和行(12236) 京都・滋賀
後藤利雄(12605) 東九州
井出尚子(13491) 岐阜

28日 麗山会

29日 01会 110周年記念事業
実行委員会 山遊会

30日 公益法人運営委員会
8月来室者 250名

日本山岳会団体傷害保険 加入のおすすめ

加入対象者(被保険者): 日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、
ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人
の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい!

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談承ります。

資料
請求
先

東京海上日動火災
グループ代理店 株式会社東海日動パートナーズ東東京
団体傷害保険資料請求担当: 藤田 Mail:a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp
TEL.0120-161-808 FAX.0120-161-809



I N F
O R M

インフォメーション

A I
O N

◆北八ヶ岳紅葉山行

集委員会

昨年の紅葉山行終点の麦草峠から、森を抜けて雨池・双子池と池を巡ります。2日目は少しがんばって蓼科山から蓼科へ下山します。今年も北八ヶ岳の紅葉をゆっくり楽しみたいと思います。

日程 10月19日(土)～20日(日)
集合 19日11時25分 JR茅野駅
解散 20日17時15分 JR茅野駅
宿泊 19日 双子池ヒュッテ
費用 1万2千円(宿泊、弁当、保険料他)
定員 15名

申込 9月30日迄に、征矢三樹

03(3770)4228
Fax 03(3770)4228
Soyamiki@td5.so-net.ne.jp

*申込者に詳細案内を送ります。

◆シンポジウムのご案内

緑爽会

協力 AACK/モアジョイ会

「私に2本のバラを持たせてください」——高橋健治とローゼ夫人の生涯——

斎藤清明(京大文学部山岳会)
坪井靖子(モアジョイ会)
吉田理一(越後支部)
司会・芳賀孝郎(元副会長)

三高・京大を通じて卓越したクライマーでスキーの名手だった高橋健治。今西錦司・西堀榮三郎と三羽鳥と呼ばれながら戦後間もなく夭折した健治の死後、半世紀を生きて『北越雪譜』の独訳・英訳を遺し、世界平和にも貢献したローゼ・レッサの生涯を語ります。

日時 10月25日(金)18時
場所 日本山岳会 104号室
申込 ハガキまたはFAXで、
近藤緑

〒167-0042 杉並区西荻北2-1-1
0-22-502

Fax 03(3395)0326

◆講習会のお知らせ

山遊会

「楽しく歩くためのツボ」を教えます。山歩きで疲れを残さない足のケアを、実技を交えて伝授します。

日時 10月18日(金)19時～20時30分
会場 日本山岳会 104号室

講師 渡辺真一(山遊会会員、鍼灸師・あん摩マッサージ指圧師)

定員 先着30名
費用 200円(資料代)
申込 松島岳生

TEL & FAX 03(6760)7835
g-matsushima@jcom.home.ne.jp

◆第50回学生部マラソン大会(記念大会)のお知らせ

学生部

第50回学生部マラソン大会(記念大会)を開催します。

50回を記念して、全国の大学山岳部、WV部など山岳関係のサークルを対象に、男女学生(一部OBチーム)を募集します。豪華景品を準備しています。夜は懇親会を都内の会場で行ないます。

期日 11月9日(土)
場所 皇居周回コース桜田門スタ

11月

日程 午前：団体戦1人1周(約5キロ)
午後：個人戦3周(約15キロ)

*詳細は近日中にJACCホームページにて発表します。

■お詫びと訂正

「山」8月(819)号の「活動報告」、図書委員会の報告に間違いがありました。書名は『山城別登高記録索引』。また、2段17行は『山の本』です。

ともに訂正してお詫びいたします。(図書委員会)

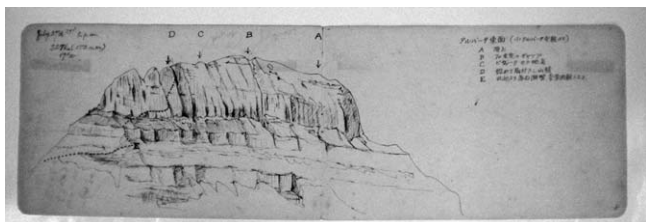
◆編集後記◆

●巻頭は、会報編集委員である日本嘉伸さん。彼の言う「老年」日本山岳会に未来を見いだすとしたら、それは若者や子どもたちの将来とこれまで蓄積した智慧の融合か。

●YOUTH CLUBの一環として、一般の若い登山者たちに日本山岳会に関心を持ってもらうための企画「FULARI Trip」を実施した。FULARI Tripは、ネパール語で「庭」の意味。庭を愛し、庭(日常)で遊んできた人

日本山岳会蔵資料紹介 No.5

[資産番号] 00263
 [資料名] 山岳スケッチ
 [部門名] 絵画
 [寄贈者] 三田静子
 [受入日] 1992年



①アルバータ東面(小アルバータ中腹より)



②カンチェンジュンガ山群

第11代(1968年4月～1973年4月)会長を務めた三田幸夫(1900～1991年)より寄贈された資料は、山岳スケッチと書簡関係の2つに分類される。今号では数点のスケッチから2点を、次号で書簡を紹介する。

これらスケッチの貴重なところは、当時、初登頂合戦という時代背景のなかで最前線にいた三田が、日本の登山家仲間にエネルギーに1分でも早く情報を伝えようとしていた姿勢が見てとれるところにある。慶大山岳部時代は日本アルプス登山史に名を刻み、1925年にはカナディアン・ロッキーのアルバータ峰初登頂に成功し、世界の山岳会を賑わし賞賛された。インド勤務中は、自分の目で集めたヒマラヤの情報を惜しげもなく発信し続けた。それが情報として活かされ、日本のヒマラヤ登山の門戸を開き、日本山岳界の発展に尽くした点にあらう。

①は、アルバータ東面のスケッチで、「July/27/25 2pm, 2276m」とある。初登頂を成し遂げた後に描いたもので、右上に、「A 頂上、B 70米突のギャップ、C ビヴァークせる地点、D 始めて取り付きし山稜、E 此処より落石頻繁、登攀困難となる」などのメモ。さらに、左下に「岩、クロアール、氷のステップ」、「帰還 ステップヲ切りニ」の文字や、点線で記されたルートも見ることができる。

②は、カンチェンジュンガ山群を望んだもので、「Rinchenoungのバンガローより(6000ft) 29/12/28、望遠鏡写真を複写」とある。各ピークは、C : Narsing (19130ft)、E : Jubonu (19530ft)、F : Pandim (22010ft)。下部分にフィートをメートルに換算したり、距離を計算した跡がある。さらに、「a、b 谷ニ登レル、c、D ridgeニ登レル、E peakモ可能(南ヨリ)、F 南側peakニ登ル氷、ridge困難在ナリ、G cニ登ルridgeノ縦走は困難在ナリ、H、Gノ谷ハ可能性アリ GヨリEニ登ルモ可能性アリ」などのメモ書きも見えてとれる(数字や文字などは、スケッチのメモ記述通りに記載)。

なお、日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→資料映像委員会→所蔵資料紹介へとアクセスすると、「会報ページそのもの」を拡大して見るができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください 図jacshiryō102@jac.or.jp (資料映像委員会)

日本山岳会会報 山 820号

2013年(平成25年)9月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 森 武昭
 編集人 柏 澄子
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社

たちに、その先にある自然にも目を向けてもらいたい、という気持ちで名づけた。庭の少し先に飛び出せば、そこには、山岳地帯があり大きな夢が広がっている、という思いもある。今年の舞台は上高地と徳本峠。自然豊かで、すばらしい景観。日本山岳会にとっても、また日本の登山を語る上においても、歴史的に重要なポイントだ。かつてこの峠を、松本藩の林業従事者や漢方医、そして文学者たちなど皆が、そして馬や牛が越えたことに思いをはせた。

●また江本さんの記事にある、「ただちに命を守る」行動について、この力こそ、山に登る者が一般に向けて発信できるメッセージではないだろうか。こういったあたりに、日本山岳会が未来へ向かう扉の鍵を探っている。(柏 澄子)